

2025年11月26日 水曜祈り会

吉田真司

本日の学び テーマ：「神の靈が降るとき」 テキスト：ヨエル3章1-5節

【理解の手がかりとして】

■ 本課のテキスト（3:1-5）から ※『新共同訳 旧約聖書注解Ⅲ』より

神の靈が注がれ、それに伴う不思議なしるしが約束される。「主の民すべてが預言者になればよい」（民 11:29）というモーセの願望を満たすかのように、メシアの時代の特徴として、すべての人に靈が注がれる。

「ついに、我々の上に、靈が高い天から注がれる。」（イザヤ 32:15）

「あなたの子孫にわたしの靈を注ぎ、あなたの末にわたしの祝福を与える。」（イザヤ 44:3）
「わたしの靈をお前たちの中に置き、わたしの揃に従って歩ませ、わたしの裁きを守り行わせる。」（エゼキエル 36:27）

「わが靈」（3:1）は神の息・神の力。神はその息で、存在物一切を創造された（創世記 1:1）。
神の靈の付与とは、神が人の命を支え、歴史の中で力強い業を行い、救いを与えることである。

特に罪ひとである人間は、この「神の靈」なしには力に欠け、神の意志と一致して生きることができない。→「神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな靈を授けてください。」（詩編 51:12）これは、神が共に生きる、という意味でもある。

神の靈は、イスラエルの歴史と伝統の中で、神の特別な選びと好意を受けた者（王、士師、預言者など）にだけ注がれるものであった。しかしこのヨエルの預言は「すべての人」（3:1）への靈の注ぎである。そしてそれは前述のように、メシアの時代の特徴であり、終末の時代の救いのしるしであった。

その「すべての人」の「人」とは、「靈」の対立概念であって、弱さや不完全さの意味を込めた存在である。ヘブライ語では「すべての肉」である。そうして神の靈は、心の一新を与える。「夢」「幻」は神の預言を証明する特徴。

2 節の「奴隸」という語は、エジプトでの生活を彷彿とさせる。つまり「第二の出エジプト」か。神ならぬ物への隸属からの脱出である。「しるし」（3:3）は自然界の異変、災害を主に表す。いなごの大群による災いもそれである。

「主の御名を呼ぶ」（3:5）は礼拝と神への信仰の告白を意味する。

「彼がわが名を呼べば、わたしは彼に答え、『彼こそわたしの民』と言い、彼は、『主こそわたしの神』と答えるであろう。」（ゼカリア 13:9）

「主の名を呼び求める者は皆、救われる。」（使徒 2:21）

こうして、人間の側の叫びと神の応答との間に救いが達成される。主に信頼し、期待する「すべての人」「御名を呼ぶ者」は、神の裁きの試練の中で逃れ場を見出し、救われる所以ある。

■ 「残りの者」（3:5）について

左近淑（さこん・きよし）が、聖書に見る「残りの者」の思想について次のように書いている。「〈残す〉とは徹底的破壊のあとにうち立てられる神の約束にみちた計画である。・・・それは終末的希望であって、神以外に根拠をもたぬ概念である。・・・残りの者の根拠は人間的資質や可能性にあるのではない。残りの者自身の〈義〉にあるのではない。それは神の熱心によるのであり、神ご自身の義の貫徹に根拠づけられる。使徒パウロは明瞭に、・・・残りの者の根拠を神の恵みにおいていている。これにたいする残りの者の側の応答は信頼しかない。いいかえるなら、神により頼み、主を望む信仰集団、つまり教会の在り方である。」

左近氏が言われるところの「教会」という括がりで、この「残りの者」という思想を捉えたい。教会とは、神の救いを信じて、それは個々人の事柄を遙かに超える世界規模の救いを信じて、「終末」という大きな時の射程で、その神のご計画が進められていることを確信して歩む者たちである。主の心を私たち教会の、一人ひとりの心とし、2ペトロ書の言葉を心に刻もう。「一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」（2ペトロ 3:9）。

■ 聖書教育より

「聖霊を受けた弟子たちによって、イエスさまの神の国の福音は、あらゆる国の言葉で、あらゆる国の人々に宣べ伝えられてゆきました。今も変わることなく、イエスさまの神の国の福音が分かれ合われる所では、悔い改めと、希望と喜びが沸き起こります。それは確かに真実です。」（聖書の学び）※世界祈祷週間の動機付け

